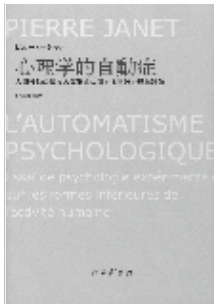


■ 書 評



心理学的自動症—人間行動の低次の諸形式に関する実験心理学試論—

ピエール・ジャネ 著
松本雅彦 訳

みすず書房 2013年4月
536頁 定価7,350円

ジャネの大著が著名な精神病理学者によって見事な日本語に翻訳された、500頁に至らんとする大著である。記念碑的な訳業となるであろう。評者は、どうせ書評をするのなら骨のあるものを取り上げたいと思って本書を選んだのだが、正直、明快な訳文で読んででもヴォリュームのあり過ぎるステーキを食べたようで、消化不良を起こしている感がある。

取り扱っているのは、今日、ヒステリー、ないしは解離と呼ばれる病理を持つ患者である。手法は実験心理学的手法であり、ジャネ自身が暗示をかけて観察をすることなどを介して、理論を組み立て、仮説を検証していく。その微に入り細にわたるプロセスをほとんど紹介できないのは残念である。一例だけあげておこう。

ある患者を睡眠状態に導く。そこで、「目をさましたらあなたは十字のカードは見ないでしょう」という言葉をかける。目をさました患者は、十字ではないカードだけを見て治療者に渡す。ここでジャネは、目をさました患者は十字を見ていないが、十字が見えている部分もあるという仮説、ないし理論を導く。十字が見えていなかったら、なぜ十字のあるカードのみを渡さないということが出来るだろうか。そして、人間には、ジャネが無意識ではなく下意識と呼ぶ領域があり、そこに、感覚、ないし知覚はなされているが、意識にはのぼっていない領域があるということを導く。

下意識とならんで重要なタームは心理学的自動症である。自動症は、ほかからの刺激によって生じるものではない。それ自体が規則的なまとまり

のある動きを作っていくものである。しかし、意識的な人間の精神活動ではない。この心理学的自動症の名に値する活動があるということを示すことが、本書の目標の1つとなっている。

ジャネの論述は哲学、生理学、ヒステリー詐病説に包囲されながら、心理学的領域を確保しつつ進む。詐病説については、たとえば感覚麻痺や自動書記といったものが実は意識的な詐病の結果であるという説に反駁する。生理学的知見については、ヒステリーが生じている領野と既存の生理学的疾患の責任領野の区別はされるが、さまざまな器質的状况での意識野の減損なども参照される。哲学については、完全に合理的な意識、理性と自動機械とを分けたデカルトに抗し、メヌ・ド・ピランとライブニッツが参照される。メヌ・ド・ピランについては、ピランが、感覚はあるが、その感覚の自覚がないと言っていた領域があることを重視する。「自我がなくてもいろいろな感覚がありうる。私が見ると言われなくても“見る”はありうる」という点でジャネはピランに賛意を示しながらヒステリー患者に切り込む。ライブニッツが参照されているのは、ライブニッツがモナドにさまざまな個体のレベルを想定したからである。意識には無限の次元があるという点でジャネはライブニッツに賛意を示しつつ、程度の差のある意識野の減損状態の分析に向かう。

こうして、ヒステリー性のカトニーの分析から始まった手法は、徐々に、今日の多重人格的な病態を明らかにしていく。さらに、精神病一般について、階層構造が推定される人間における「精神力の衰弱」が語られる。

1つ残る問いは、ここに示されるような重大なヒステリーの病態が、権威ある医師ないし治療者が、患者を診察し、ときにそこで実験を行って理論を組み立て、ときに一般に供覧するという舞台があることの産物なのではないかという問いである。この問題意識は、ジャネが医師になる前に書かれたこの大著の博士論文の中には現れていない。

(津田 均)